

「はい♡ テレビの前の眠たそうなそのアナタ♡ そう、わたしのおまぬけマスターさんのことですよ♡ 今日もクエスト、お疲れ様ですよ♡ お疲れのセンパイに、わたしからとっておきの癒しを提供しまあす♡」

自室に帰った途端、真つ暗な部屋を煌々と照らすタブレット端末からそんな声が出た。嫌な予感がある。俺はとっさに扉を閉めて逃げようとした。しかしその手は、廊下から伸びてきた手によって阻止される。

「逃げようとしても無駄ですよ、センパイ♡ わたしから逃げられると思いませんか？ うふ、そんな甘い考えを抱いているなら、もう一度教育が必要、ですねえ？」

いつの間にか背後にいたBBが俺の背を軽く押し、自室へと連れ込まれる。真つ暗な部屋でおろおろしていると、パチリと電灯が点けられる。

「ふふ、情けなあい、真つ暗だと自分の部屋もまともに歩けないんですか？」

「……夜行性じゃないからね」

驚きを表に出さないようにしてそう返す。やつと視界に入ってきたBBの姿は、いつもと少し違っていた。黒いマントを羽織っていることはいつもと違いないのだが、そのマントの前をびつ

ちりと閉めてしまい、レオタードとスカートが見えないようになっていてところが違っていた。

「それで、用事って何だったの？」

そう問いかけると、BBは待っていましたと言わんばかりに意地の悪い笑みを浮かべる。

「このところ、センパイとえっちなことをする機会もあんまりなかったですし、ていうか気の利かないマスターさんのせいで行為もマンネリ気味でしたし？ ここはセンパイの疲れを癒すという名目を掲げてBBちゃんが頑張る時かと！」

BBがマントの前を開き、じゃーん、と自分で効果音をつけてそれを披露する。そこには普段のレオタードとスカートはなく、肌色が広がっていた。しかし、胸と下半身の大事なところには黒い布があった。そこをギリギリ覆い隠すだけのマイクロピキニは、BBが動くたびに際どいところが見えそうになる。俺はごくりと喉を鳴らす。

「んふ♡ すっかり元気そうで何よりですよ♡ それで、変態のマスターさんに朗報なのですが、BBちゃん、今日はこんなものを用意してて」

BBはマントの影から手品のように手錠とアイマスクを取り出す。

「いつものセックスにちよつとした小道具。粋なBBちゃんの計らい、読み取ってくれましたか？ うふふ、それではセンパイ、手をこちらにどうぞ♡」

「あ、俺がそれつけるんだ？」

「もちろんです！ 今日はBBちゃんに大人しく翻弄されてください♡」

BBの目論見では、俺に手錠をつけてBBが主導権を握る。そんなものだろう。しかし俺もそんなものに素直に騙されてやる男ではない。大人しく腕を差し出すと、マントを脱ぎ捨てたBBがベッドに近寄ってくる。タイミングを見計らって、BBの手から手錠を奪い取り、ベッドに押し倒す。

「えっ!？」

「悪いなBB、お前の計画通りにはさせないぞ」

がちゃん、と手錠をBBの片手に嵌める。

「ちよつと、センパイ!？」

抵抗するBBの手を押さえつけ、手錠をベッドの柵に通しもう片方の手も拘束する。これでBBは完全に身動きが取れなくなつたはずだ。普段は生意気な態度を取っているが、本気で反抗しないということは、つまりそういうことだろう。

「……やつてくれましたねえ、センパイ。BBちゃんにこんなこ

として許されると思うんですかあ？」

「でも興奮してるんだろ？」

ベッドに拘束されたBBの太ももを撫でる。しつとりと汗をかいた肌が手のひらに吸い付く。マイクロピキニの紐をくいと動かすと、BBの体がびくりと動く。は、と浅く息を吐いたBBは、唇を噛み締めて強がった表情を見せた。

「べ、別にいい？ ていうか、わたしはちよつとSなデビル系後輩ですし、拘束するのはあり得ても、されても全然興奮なんてしな……ひやつ♡」

布の上から陰部を撫でると、BBは高い声を上げた。そこは布の上からでもわかるほどにぐっしりと濡れていた。

「せ、センパイ、何して……っ♡ ほ、ほんとにこのままするつもりなんですか!？」

床に落ちたままのアイマスクを拾い、まだじたばたと暴れるBBにそれをつける。視界を奪われたBBは若干大人しくなり、ベッドの上でもぞもぞと足を擦り合わせた。

「っ、センパイ……?」

少し戸惑った様子のBBにキスをする。ちゅ、ちゅ、と軽いキスを落とすと、淡く吐息を漏らす。キスを数回重ねるうちに、BBの方からそろりと舌を差し出してきた。